

掘りday  はちのへ
—八戸市埋蔵文化財ニュース 第4号—



田向冷水遺跡から古墳時代の竪穴住居発見

市内、田向地区にある田向冷水遺跡^{たむかいひやみず}から約1500年前の古墳時代中期後半の竪穴住居がみつかりました。青森県ではこの時代の竪穴住居は初めての発見です。竪穴住居は、四角形で大きさは東西5.8m、南北5.6mあり、一度作り替えられています。北側には粘土で造られたカマドがあります。発掘調査では、土師器^{はじき}という古墳時代の素焼きの土器と、この当時の北海道に多

くみられる縄文の文様がついた縄文土器^{ぞくじょうもん}が一緒に出土しています。これは広い範囲の中で文化交流が行われていたことを示す注目される資料です。遺跡は、新井田川に面した標高8m～20mほどの小高い丘に立地しており、住まいに適したところだったと思われます。

(宇部 則保)

是川中居遺跡

—低湿地遺跡の調査—

木製の耳飾りや腕輪、櫛などの装飾品をはじめ、木胎鉢や布など、2,500年以上前の植物質の道具が良好な保存状態で見つかりました。でも、ふつうなら腐ってしまうものがなぜ腐らずに残っていたのでしょうか？…遺跡の土に秘密があるようです。遺跡の土は泥炭層^{でいたんそう}といって湿った植物をたくさん含む土です。これはいつも水にひたっている湿地の場所のできる土で、酸素や微生物が入ってこないため、ふつう腐ってしまうものが腐らずに残ります。是川中居遺跡も地下水が豊富で年中湿っていたため、泥炭層^{でいたんそう}ができて、様々なものが腐らずに見つかる低湿地遺跡^{ていしつち}になったようです。

今年度は北側の長田沢地区と、南側の中居地区の2地点を調査し、それぞれの捨て場が見つかりました。

長田沢地区は遺物が出土するまで2m以上と深いため、矢板を打ち込み、大量の湧き水をポンプで汲み出しながら調査しました。ここから出土する土器は晩期中葉(約2,600～2,300年前)のものが多いため、中居地区より少し新しい時代の遺跡であることがわかりました。遺物は、ヨシやアシの泥炭層を2mほど掘り下げると出土し始め、完全な形に近い土器がまとまって大量に出土しました。さらに掘り下げた結果、大小さまざまな石が広がる川底が出てきました。また、東側に拡張した調査区では地滑りのあとが見つかり、遺物が土ごと沢に滑り落ちたことがわかりました。地滑りの下の層からは大量のクルミの殻などとともに、耳飾りなどの木製品や縄文時代の布、編布が2点出土しました。いずれの編布もねじれて、棒状になっています。漆をこした後に絞ってすてられたのでしょう。

中居地区は湿地だったので、表土の地盤が弱くなっています。そのため実際に掘る範囲よりも大きく段をつけた調査区を設定しました。ここから出土する土器は晩期初め(約3,000年前)のもので、長田沢地区より少し古くなります。調査の結果、沢が2本見つかり、それぞれに遺物が投げ込まれた捨て場になっていたことがわかりました。

北の沢には大量のトチの殻などが捨てられ、一番厚い場所では殻だけで約80cmも積み重なって、いわば堅果層^{けんかそう}となっています。その堅果層から、赤漆塗りの弓や、3mもあるクリの木を加工した柱材^{ちゅうざい}が出土しました。この柱材は二股の先がホゾのように加工してあるほか、真ん中の部分が一段低く削り込まれたもので、全体の上半分が焼け焦げています。南の沢を埋めた泥炭層からは、赤漆塗りの櫛や大形の鉢、耳飾り、腕輪などの木製品のほか、櫂(オール)状の木製品なども出土しました。

また、昨年度採取した土を花粉分析した結果、クリの花粉が自然環境よりもはるかに多いことがわかりました。これは、縄文人が食料や木材となるクリを、ほかの木より優先的に管理し、周辺の山を里山としていたためと考えられます。

平成13年度も様々な視点で、当時の生活がわかるような発掘調査をしていく予定です。

(小久保 拓也)



編布 (あんぎん)



赤漆塗り大形木胎鉢



柱材

丹後平古墳 (たんごたいこふん)

— 蝦夷の族長墓 —

丹後平古墳は八戸ニュータウン内の八戸圏域水道企業団近くにあり、現在は約7,000㎡が国史跡として保存されています。

丹後平古墳は7世紀末から8世紀頃の群集墳で、当時は直径6m前後の小さな円墳がたくさん並んでいたと思われます。ちなみにこれまで調査された古墳は、北側に接する丹後平(1)遺跡(8～9世紀)を加えると86基を数えます。

右上は丹後平古墳29号墳の調査終了時の写真です。丸く巡った溝(周溝)とその中央に長方形の浅い掘り込みがあります。長方形の部分が遺体を埋葬したところですが、人骨は未発見です。

平成12年度の調査で、29号墳の周溝が鍔帯金具(かたいかなぐ)が出土しました。鍔帯金具は、律令制下の奈良時代に朝廷から役人に配られたとされるベルトの飾り金具です。通常は青銅製で、上に黒漆が塗られたり、金・銀のメッキが施されたりしたそうです。

29号墳から発見されたのは、四角い形の巡方(じゅんぼう)4点、カマボコ形の丸軀(まるとも)3点、ベルトの端の金具の鉞尾(だび)1点で、すべて鉄製です。大きさは巡方の一辺が約3cmです。巡方と丸軀には下側に長方形の小さな孔が開いています。表金具と裏金具があり、ベルトをはさんで鉞で止めたと考えられ、一部には鉞の跡が残っています。黒漆やメッキの跡は現在のところ確認されていません。

今回、鉸具(かこ)と呼ばれるバックル部分は見つかりませんでした。ほぼ一帯分の金具



29号古墳

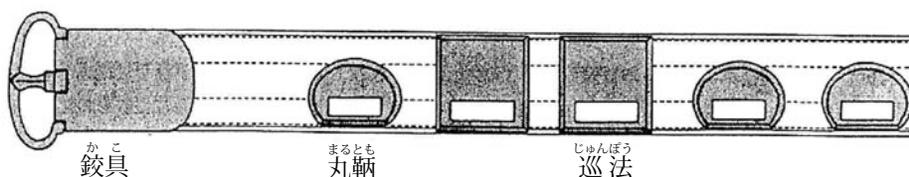


鍔帯金具

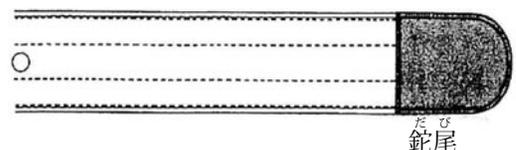
がそろっていたと思われ、ベルトのまま死者の墓前に供えた可能性が高いと考えられます。

青森県は律令制が及ばなかった地域なので、この鍔帯金具は役人が持っていたものというわけではなさそうです。被葬者やその一族が朝貢したり何か協力をしたおりにもらったものか、それとも真似て作ったものかなど、さまざまな想定ができますが、律令制と何らかの接触があったことを示す物的証拠として貴重な遺物です。

(渡 則子)



鍔帯模式図



松村恵司「鍔帯の復元的研究」1987より

八戸城跡（はちのへじょうあと） —遺物の発見とその後—

昨年行った八戸城の発掘調査で、県内初となる貴重な遺物が2点見つかりました。それは、弥生時代の、土偶のような壺形の土器と、古墳時代の甕（はそう）と呼ばれる須恵器です。どちらも既に公表済みですが、これらの遺物がどのようにして発見され、その後どうなるのか興味のある方も多いのではないのでしょうか。そこで、調査の過程をドキュメンタリータッチでお話したいと思います。

—土偶様壺形土器の発見—

そこは、市内中心部の内丸地区にある三八城公園の中。調査が終盤を迎えていた、平成12年10月11日のことである。弥生時代の住居の精査に当たっていた作業員が急に騒ぎ出した。私はどうしたのかと思い、「なした？」と声をかけた。「監督、これなに？」と作業員。歩み寄ってみると、住居の床面に異様な物体が顔を覗かせている。それは、私がこれまで見たことのない遺物であった。人間の上半身のような形をした、扁平な逆三角形の壺。土偶に良く見られる文様が付けられている。これは貴重なものに違いない、そう直感した私は慎重に作業を進めるよう指示し、この土器が発見された状況を写真と図面に記録した。これを現場から取り上げたのは、10月17日のことである。

その後、野外での発掘調査を終え整理作業に入った12月、再びこの土器を手にした。まず、分析用として保存するため、土器の中の土を丁寧に取り出す。次に、土器を洗い乾燥させ、実測図の作成と、写真撮影を行った。そして、類似する資料がないかどうか調べ、土偶様壺形土器と住居跡との関係を検証した。ここでさらに、我々発掘チームのリーダーである工藤さんをお願いして、土偶や弥生時代のことに詳しい研究者に問い合わせてもらい、この遺物のもつ意味を確かめた。そうして各資料を作成した12月15日、報道機関に対

して発表を行っている。しかし、これで終わりではない。土偶様壺型土器が何に使われ、どんな人物が所有していたのか、その疑問は今も続いている。

—須恵器甕の発見—

調査が後半にさしかかった9月の始め、攪乱（かくらん＝遺跡とは関係のない現代の掘り込み）を除去していたときのことである。その断面に、ねずみ色をした焼き物が突き刺さっているのを作業員が発見した。一目で須恵器と分かる。年代を確認するため引き抜いてみると、それは紛れもなく古墳時代のもので、水を注ぐための管を通す孔があいていた。これは！私の体を衝撃が駆け抜けた。そう、県内初出土の須恵器甕であった。その後の調査で、この遺物は土坑に伴うものであることが判明した。しかし、残念なことに土坑の半分以上が攪乱を受けていたため、甕は完全に復元されることはなかった。

甕を職場に持ち帰って先輩方に見せると、みんなが様に驚いた。今後、この遺物がどこから持ち込まれたものか、産地を特定しなければならない。また、年代についても5世紀後半ごろと推定されるが、さらに検討しなければならない。

土偶様壺形土器は、東北地方北部の弥生時代の祭祀を考えるうえで、極めて重要な遺物といえます。また、古墳時代中ごろの須恵器の発見は、県内では天間林村の森ヶ沢遺跡、十和田湖町の三日市遺跡に次いで3例目となりました。これらの貴重な遺物は、実測図の作成と写真撮影といった通常の手続きのほか、十分な研究がされた後、報告書に掲載されます。そして、八戸市民の貴重な財産として博物館に収蔵され、いつか展示されることになるでしょう。

（小保内 裕之）



土偶様壺形土器出土状況



須恵器甕出土状況（部分）



須恵器甕（部分）

牛ヶ沢 (4) 遺跡 (うしがさわ) —平安時代の小鍛冶—

牛ヶ沢 (4) 遺跡は八戸市の南部松館地区に所在し、標高 50～100m の南側傾斜地に立地します。本調査は平成 8 年度から平成 14 年度までの予定で行われています。これまでの調査によって縄文時代を主体に、弥生時代・奈良時代・平安時代の住居跡や土坑等が発見され、各時代にムラを営んでいたことが判っています。

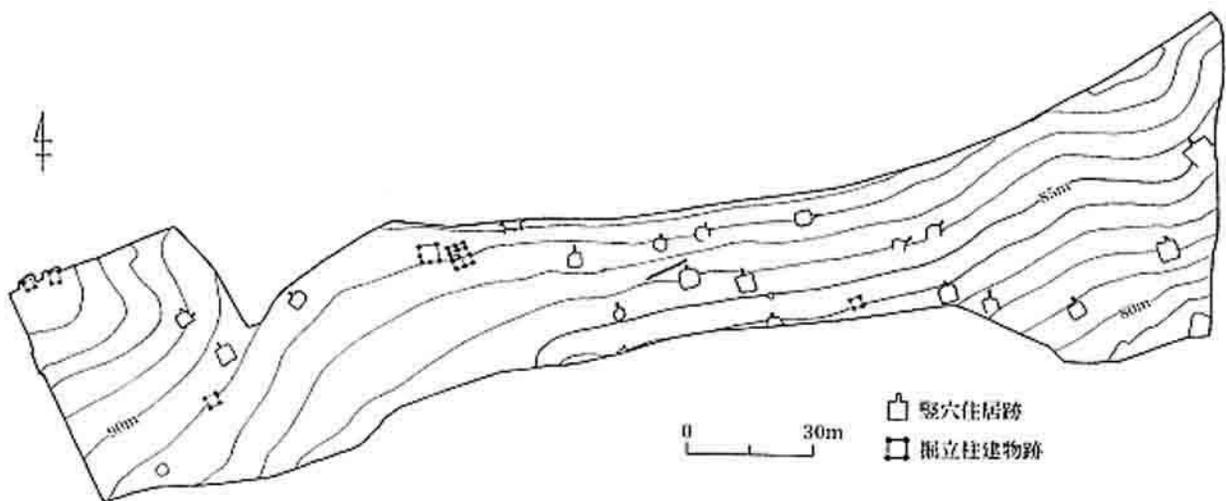
今回の調査では縄文時代の土坑と平安時代のカマドを設けた住居跡が多く発見されました。

特に、平安時代の住居跡群のなかで、床面の中央に鍛冶炉が設けられていたのが初めて 1 棟見つかりました。この施設は径 45cm・深さ 16cm の円形をした小穴で、内面は火熱によって灰色～赤色に変色しています。また、小穴の両側に長さ 35～40cm の溝が付けられています。

この住居跡からは原料の砂鉄をはじめ、鍛冶使用の道具である送風管の羽口、鉄を熱して溶かすのに用いる容器の坩堝や加工・修理時の鍛造した際に生じた微小鉄片等の小鍛冶に関する貴重な資料も得ることができました。ムラに鍛冶屋の存在を示す好例といえます。

さらに、平安時代の遺構として土坑や溝跡、そして居住以外の物置や倉庫に使用されたと考えられる竪穴遺構や掘立柱を立てた建物跡が新たに発見されています。

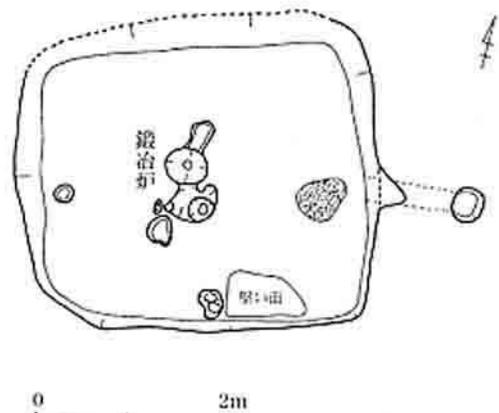
平安時代の山あいにも営まれたムラの姿は、今後の調査が進むにつれてより鮮明に浮かび上がるものと思われます。(小笠原善範)



ムラの様子 (平安時代)



鍛冶炉のある竪穴住居跡



同 左: 平面図

盲堤沢 (3) 遺跡

続縄文土器出土する！

平成 12 年 5 月八戸市盲堤沢 (3) 遺跡で、続縄文土器が出土しました。調査区北端の丘陵縁の土坑からみつかりました。土坑は、南北 80cm 東西 65cm の楕円形で、深さは約 20cm です。土器は、その堆積土の上層から重なり合うように出土しました。底部が欠けていますが、高さ約 30cm の深鉢です。突起が 4 個あり、楕円・弧状の隆起線文、帯縄文、列点文が施されています。この土器は、後北 C2・D 式とよばれる続縄文時代後半の土器です。土坑の性格は不明ですが、弥生時代の終わりから古墳時代にかけての当地域を考える上で、貴重な発見となりました。



続縄文土器



続縄文土器出土状況 (SK1)



調査風景

盲堤沢 (3) 遺跡は、八戸市の中心部から南西に約 3km ニュータウンの西側に位置しています。平成 12 年度都市計画街路建設に伴う発掘調査を実施しました。検出された遺構は、続縄文土器が出土した土坑以外古代の遺構であり、奈良時代の集落跡であったことがわかりました。竪穴住居跡 16 棟、竪穴遺構 5 棟、円形周溝 6 基、土坑 15 基、溝跡 5 条がみつかりました。円形周溝は、内径 3m 前後であり、近くにある丹後平古墳群の中の小規模な古墳と類似しています。埋葬施設は不明ですが、墓 (円墳) の可能性が考えられます。周辺の田面木遺跡でも、同じく集落内に円形周溝が検出されています。丹後平古墳群のような集落から離れて形成される墓域と、集落内に墓をつくるという、奈良時代の墓制の違いが想定されます。

(大野 亨)

文化課の四季

日本の文化は、四季に彩られ育まれてきました。そして我が文化課もまためぐりめぐり四季があります。

— 春 —



燕島のウミネコがもう3万羽も飛来し、賑やかな恋の季節が始まる頃、ウミネコへのエサやり問題で四季の幕開けとなります。

ここ、北国八戸の、遅い春がやっと桜のつぼみをほころばす頃、文化課では夜遅くまで、今年度の発掘調査の準備におおわらわです。業者との機械等の契約や、発掘作業員さん確保のための電話をいっせいにかけ始めるのです。思えばこの頃が、文化課の一年を通して最も活気づく頃なのです。

そして、桜も散って、すっかり葉桜になり、新緑の季節を迎える頃、いよいよ今年度の発掘調査開始です。

— 夏 —



どこからか夕風に乗ってまつりばやし聞こえ出す頃から、現場に向かうみんなの顔や腕は日に日に色付きたくましくなってくるのです。一日中庁内で過ごす私は、このころが最もみんなと外へ出たくなる頃です。

夏といえばお祭り。我が文化課では3年がかりで八戸三社大祭民俗文化財調査をしており、今年はいよいよその最後の年で、報告書の完成に向けての正念場です。それに今年は、銅像の建立事業があり、その除幕式がお祭り前夜祭の7月31日となっているので、それこそ事務方の私達は、お祭り騒ぎの忙しさを迎えることでしょう。

夏は最も天気予報の気になる季節です。突然の雷雨でびしょぬれで帰ってきたり、木陰のない現場では、あまりの暑さで倒れる作業員さんもでたりするので、いつも天気予報で、雨の確率や最高気温を気にしています。

それでもこの頃から各現場では、いろいろな遺物が出土しだし、連日のように新聞やテレビを賑わします。課内に報道関係者が頻繁に出入りするものこの頃です。

— 秋 —



朝晩がめっきり涼しくなる頃、いよいよ発掘調査の成果発表である現地説明会の季節です。報告のための資料づくりも大変ですが、一般の方々に現場を見せながらメガホン越しに説明をしたり、また、記者発表をしたりと世間の脚光を浴びる頃でもあるのです。

野山が色付きはじめ、やがて枯れ葉の季節を迎える頃、そろそろ発掘調査も終わりです。それでもケリのつかない現場では延長が続き、雪の降る頃まで続いたとか続かないとか・・・。

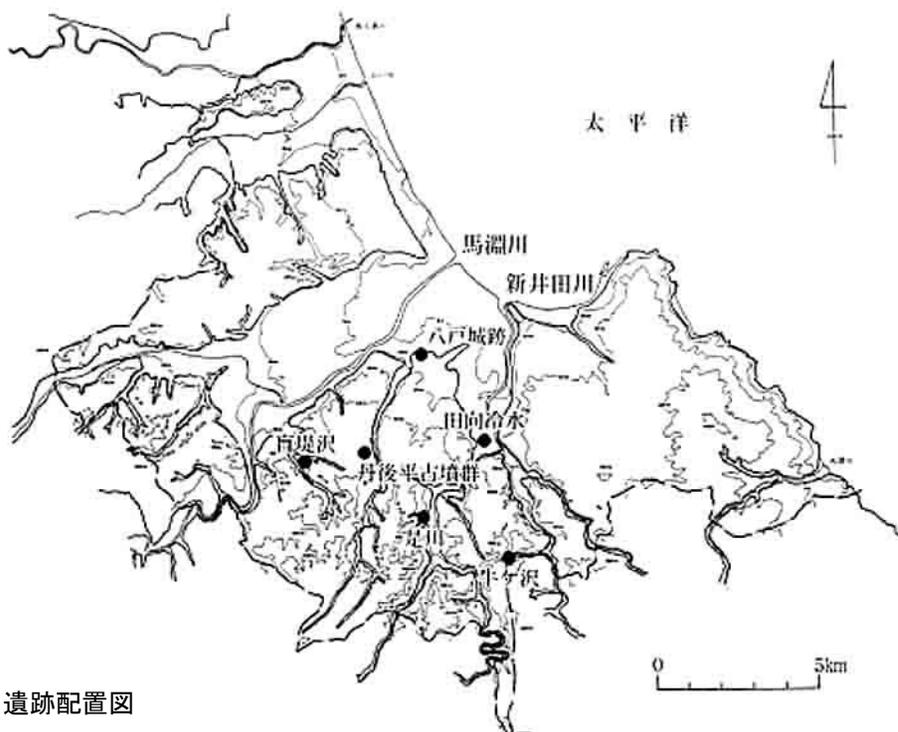
— 冬 —



木枯らしが吹き、そろそろ師走を迎える頃、いよいよ冬場の作業が始まります。現場を終えたみんなは、分室（庁内では収蔵しきれない出土遺物の置場や整理する作業スペース確保のため、更上閣別館に文化課分室を設けている。）へと移って行き、また課内は終日ガラんとした状態が続きます。分室では、連日夜遅くまで、それに休日返上で、報告書の作成をします。部屋に足を踏み入るとまるで縄文の匂いがするくらい、土器のかけらがあたり一面にあり、それをジグソーパズルのように組み立て、土器を復元する様は根気・忍耐がなければつとまらないと短気の私は感心します。また、トレースを担当する作業員さんは、学芸員の片腕となり、報告書の完成をめざします。とまあ、発掘のことばかり書きましたが、我が文化課は、新年度は、四億円を超える予算で各事業を執行します。銅像建立、燕島うみねこ繁殖地の保存活用、名勝種差海岸の保護、南部氏庭園、芸術パーク等々、新年度も問題が山積みです。

でも、いにしえびとは、きっと私達にロマンの風を吹き込んで心を癒してくれることでしょう。だから、みんな、今年も頑張ろうよ！

(文化課の母—貝吹 和子)



遺跡配置図